

校長室から

第22号

本校の開校はいつなのか？ ～その5～

当時私は二十五になったばかり、自他ともに許したボンヤリの世間知らず、席次も五席か六席の末席者、速答にはちゅうちよしたが破格の内命にいささか得意でないわけでもなく、社交にも経営の才能にも最も欠けるところであるが、何事も過去のいざごごには手をつけず、これからのことを文句いわれぬようにきちんとやれば、誰もことさらいじめることもあるまい。ことに視学が理解応援してくれるなら何とかかなろう。これも人生のよい学問だと、ようやく決心して承諾、こうして二月十二日付発令、当時道内第一の若い校長として、この珍しい難物らしい、西興部の瀬戸牛小学校に乗りこんだのであった。

着任して驚いた。かねて通知しておいたので生徒は青年教師に引率されて駅頭に迎えてくれたが、部落からはわずか三人の顔が見えただけ、職員室には机と椅子が青年教員の分一個あるだけ、学校に挨拶に来るものもなければ歓迎会もない。それは例の禁酒禁煙の名刺を持って私が挨拶に廻ったので、飲まぬ会合などは凡そ意義がないと思った、いなか気質であったかも知らぬ。生徒の転出入、移動の多い土地であるが、学籍簿と出席簿とは凡そ三分の一は食いちがっている。来るものはこぼまずで口頭だけで出席簿に入れるが、学籍を作らず、去る者は除かずに、前校長在任時代からの放任。これには手もつけられぬ。角田以来引き続き学籍簿係を仰せつかり、毎月、出席簿とよみ合わせ、文字一字の違いまで訂正してもらっていた私にはどうにもだまって居れず、第一、卒業生を確定することができぬ。翌日から学籍のない生徒とすでに転出していない生徒を調査して役場に走り、終日座りこんでは除籍入籍をする。戸籍上の手続き未了のため学籍を作れぬものは一々父兄を呼んで説得、大至急手続きをさせる。一週間ばかりで内地に戸籍を取りよせる数名を除いて、とにかく片付けるといふ始末、幸にいじめられたり不自由なめをしていた生徒は私を深く喜んでくれ、欠員はただちに補充する。永く入院中の女教師も少し無理であったが出てもらおうというように陣容をととのえ、何れも協力一致、実にすばらしいよい方ばかりそろったおかげで、部落の信用もようやく回復したらしく、卒業式費用(賞品代)百五十円の予算を立てるとたちまち三百円集まる。余れば校具を買ってくれという。青年団と処女会ができて運動会の下地ができる。運動会費用も予算の倍以上集まる。その余剰金で体操器具と校旗、青年団旗が新調できる。会計は鉛筆一本ハガキ一枚までもくわしくのせて父兄に報告する。余った賞品は紙一帳ノート一冊まではっきりさせる。父兄は何よりも、今までの寄付は一部役員(の飲食代になっていたのに、今度は役員も来賓も処女会員の作ったゴマつけ握飯をうすかわに包んだものだけで、出した金は賞品なり器具なりになって子供のために還元せられるのだから惜しくない)と喜んでくれるので、仕事のしやすいこと限りない。翌年は父兄会ができ、一口五銭の会費で全員喜んで入会。



西興部時代
昭和三十一年一月一日発行 豊後八十五号 「私の小中学校勤務(移)より」 村上 久吉

ガリ版刷りの原本

～つづく～